

(続紙 1)

京都大学	博士 (地域研究)	氏名	川村 楓子
論文題目	西ブータン社会におけるシングル女性に関する人類学的研究 ー女性の宗教実践とライフコース選択に着目して		
(論文内容の要旨)			
<p>本論文は、西ブータン社会において「女性として生きる」とはどういうことかを親族研究、ジェンダー研究、そして宗教実践の観点から考察する。特に西ブータンにおいて「女性がシングルとして生きる」ということに焦点をあて、それが逸脱とされないような社会のありようを数々のライフヒストリーを通して探っていく。</p> <p>序論において、先行研究を検討した上で本論文の視座が述べられる。ブータンを含むチベット系社会における家族・親族研究では、当初から一妻多夫制 (polyandry) が注目を集め、その経済的側面、社会的側面、文化的側面のそれぞれを強調する議論が行われてきた。最近では、血縁や婚姻といった制度のみにとらわれない「つながり」についての議論も行われている。一方、人類学一般では、「シングル女性」についての研究も行われるようになってきている。人類学は長年、社会を構成し再生産する組織として親族・家族を捉え、その中核的制度としての結婚に注目してきた。その中で近年、単なる「逸脱」のように捉えられがちなシングル女性を中心に据えた親族研究の積極的な意義が論じられている。本研究もそのような研究動向の一部として位置付けられる。</p> <p>第1章ではまず、ブータン社会と、家族・結婚制度の概要が述べられる。ここで重要なのは、東ブータンと西ブータンの違いである。東ブータンの相続は父系的で兄弟による均分相続、居住形態は夫方居住が標準的であるのに対し、西ブータンは双系的であるが母系的偏りが強く、財産は基本的に母から娘 (長女が望ましいとされる) に相続される。居住は妻方居住が一般的である。両親のケアも家にとどまる娘が担う場合が多い。ブータンでは伝統的に特別な婚姻儀礼はないとされる。この章において、1960年代に制定された「婚姻法」や、教育の普及、1999年のテレビ放送開始やインターネット解禁が結婚観へもたらした影響も論じられる。</p> <p>第2章では、西ブータンにおける宗教をめぐる状況と僧院・尼僧院制度について取り上げる。西ブータンでは、仏教、特にカギユ・ドゥック派の仏教が政治と強く結び付き、現在でも強い影響力を維持している。男性のライフコースにおいて、僧侶になるという選択肢はつねに身近なものであり続けてきた。それに対し、尼僧院が創立され始めたのは1980年代のことである。女性にとって、出家は容易に取りうる身近な選択肢とは言い難いという状況が長くつづいていた。しかし、近年は離婚や家庭内暴力、家族関係や社会関係からの逃避先として尼僧院が選ばれるなど、社会のシェルターと</p>			

して機能している面もあり、女性のライフコースにおいて「尼僧になる」という選択肢が徐々に広まりつつある。

第3章では、近年、大規模化し盛んに行われるようになってきた儀礼という仏教儀礼に付随して成立する、ドルジ・ピン(*Dorji Puen*)という宗教的／儀礼的キョウダイ関係について論じる。ドルジ・ピンによる「つながり」は宗教儀礼を契機とはするが、固定的なものではなく、日常生活における頻繁な行き来や、聖地巡礼・瞑想・寺院での宗教実践をともに行うことによって、その関係性が築かれる。そこからドルジ・ピンは「血」ではなく「魂」、つまり霊的な要素を介した「つながり」だとされる。シングル女性によるドルジ・ピンを通じた関係構築の具体的事例も検討される。

第4章では西ブータンに住むシングル女性20名のライフヒストリーが検討される。これらの事例は、生活基盤をもとに大まかに、都市部において自身のキャリア実現を目指す高学歴女性、農村部において拡大家族の一員として暮らす女性、僧院で暮らす女性に分けられる。さらに生活基盤に関わらず、シングルであることを選択した理由として「よりよい仏教徒であるため」と述べる女性に着目する。彼女らは必ずしも僧院に入らず、在家の生活にとどまりながらも、仏教徒として生きることを第一義とする人としてみずからを定義し、それが周囲にもある程度受け入れられている状況が提示される。

結論においては、西ブータンにおいてシングル女性たちが、都会でのキャリアや、母系的な親族関係や僧院、儀礼的キョウダイを基盤として、日々の生活を営んでいることが確認される。それらの女性のうち、よき仏教徒であるためにシングルとして生きることを選んだと述べる人たちにとっては、「シングルとして生きる」ということと「良き仏教徒として生きる」ということの双方向的関係が見られ、親族組織、信仰世界、ジェンダーのあり方など複数の要素が絡み合うことで、「女性がシングルとして生きていく」ことが逸脱にならない生き方が可能となっている、と論じる。

(論文審査の結果の要旨)

本論文は現代ブータンのシングル女性に焦点をあて、シングルとして生きることが逸脱にならない社会のありよう、そして、そのような女性たちがあるべき関係をつくりつつ、なりたい主体になっていく様相を探ろうとするものである。その過程で、ブータン社会における仏教実践の重要性を前景化し、仏教における在家・出家の区分を問い直し、周辺化された在家・女性の仏教実践を探求し、個別具体的なシングル女性たちが周囲との関係性を築きながら、制度内に留まりつつずらして生きるさまを記述しようとしたものである。

本論文の学術的意義は以下の3点である。

第1にブータン研究への貢献である。ブータンは長年にわたって、外国人研究者の長期滞在を制限してきており、実証的なフィールドワークにもとづく民族誌的研究の蓄積は他地域に比べて非常に少ない。さらに、現存する民族誌的研究も東ブータンに偏っている。そのような状況の中で、本論文は、西ブータンを中心に、西ブータンの主たる日常言語であるゾンカ語を用いて、2012年8月から2019年12月の間に行った、通算およそ19ヶ月のフィールドワークにもとづくものである。西ブータンに暮らすシングル女性のさまざまなライフコースに注目しながら、それらを通して、現代ブータンにおける親族関係、扶養、宗教の実践について、実証的な記述がなされる。宗教実践について言えば、例えば、ドルジ・ピン（儀礼的キョウダイ）の成立をとまなう、ティ (*thri*) と呼ばれる、2週間にわたる大規模な仏教儀礼は一般にジェ・ケンポ（大僧正）によって執り行われるとされるが、実際には、ある程度の幅のある主宰者によって執り行われることが示される。さらに、参加者の目的はティに参加することであって、ドルジ・ピンを得ることではないが、その場で思いがけず得た儀礼的キョウダイやその家族と、終生にわたって「血」ではなく「魂」を通じた深い関わりを築いていく場合もあることが、具体的な事例に基づいて記述されている。このように、現代ブータン社会研究にとって貴重な、多様なデータが提示されている。

第2に親族研究への貢献である。本研究は社会的に認知された血縁関係や姻族関係とは異なる、あるいはそこから少しずれた、さまざまな「かかわり」に注目するような親族研究の流れに位置づけられる。本研究はさらに比較的新しい分野である、シングル女性研究に貢献するものである。社会科学において、社会の近代化・産業化にとまなない、都会で職業を持ち、結婚しない女性が増えてきたことが、しばしば注目を集めてきた。他方、親族研究の文脈では、シングル研究が、寡婦研究から派生してきたという部分もある。本論文では、都市部において自身のキャリア実現を目指す高学歴女性、農村部において拡大家族の一員として暮らす女性、僧院で暮らす女性といった多様な社会的背景をもつ女性らのライフヒストリーを提示し、さらにはシングルであることを選択した理由

として「よりよい仏教徒であるため」と述べる女性に着目して論じることによって、シングル女性研究に新たな実証的貢献をするとともに、宗教研究との連結を通じた議論の拡大と深化の可能性を示している。

第3に、本論文はブータン研究およびシングル研究にとどまらず、広く南アジア地域や東南アジア地域における親族関係やケア、実践宗教をめぐる議論に貢献するものである。例えば双系的あるいは母系的社会における相続や扶養の実践は、南アジア・東南アジア社会研究の重要な課題であり、また出家と在家の理念的区別が存在する状況のなかで、その二項対立には収まらない実践をどのように理解していくのかというのは多くの仏教社会・ヒンドゥー社会研究における重要課題である。本論文はいまだ研究蓄積の少ない西ブータン社会での長期フィールドワークに基づいた研究を通して、それらの議論に貢献するものである。

よって、本論文は博士（地域研究）の学位論文として価値あるものと認める。また、2023年9月5日、論文内容とそれに関連した事項について試問を行った結果、合格と認めた。

なお、本論文は、京都大学学位規程第14条第2項に該当するものと判断し、公表に際しては、当該論文の全文に代えてその内容を要約したものとすることを認める。